

## 「道徳外の意味における真理と虚偽について」における 「メタファー」の意義

今崎 高秀

### 序

ニーチェは「神の死」を宣告することで、我々近代人が準拠すべき原理を、彼岸に設定された超感性的な理念ではなく、我々の「生(Leben)」へと転じることを説いた。だが注意すべきは、ニーチェ哲学における「生」概念の独自性は、「生が決して仮象(Schein)とは切り離し得ない」という洞察にこそ存するということである。

西洋哲学におけるニーチェ「仮象」概念の独自性は、1872 年公開の『悲劇の誕生』(以下『誕生』と略記)の「アポロ的仮象」に既に現れている。ショーペンハウアーの圧倒的な影響下において成立したとされる『誕生』において既に、「アポロ的なるもの」と呼ばれたニーチェの「仮象」概念は、「世界の内的意志」の象徴である「ディオニュソス的なるもの」に対して、単に従属するには尽きない役割を果たす。アッチカ悲劇においてアポロ的仮象がディオニュソスの象徴を果たしうるのは、あくまでもアポロ的仮象が、ディオニュソスと異なる属性を発揮することによってである。世界の真理よりも一段下位のものとして、それに従属するにすぎないとされる形而上学的伝統における既存の「仮象」概念を踏み越えるニーチェ独自の「仮象」概念の萌芽は、ここに既に確認することが出来る。

だがそれと同時に、「ディオニュソス的なるもの」と「アポロ的なるもの」とは決して対等の関係ではないということも、やはり見逃されるべきではないだろう。この関係は、「音楽(Musik)」と「言語(Sprache)」との不可逆な階級関係として表れている。

音楽の世界象徴法に対しては、言語をもってしては如何にしても太刀打ち

できない。理由は明瞭である。音楽が象徴的にかかわっているものは、根源的一者の心臓部における根源的矛盾、根源的苦痛に他ならず、したがって音楽が象徴している領域は、一切の現象の彼岸にあり、一切の現象の以前にあるからである(KSA 1, S.51)。

『誕生』のアポロ的「仮象」は、ニーチェ独自の「仮象」概念の萌芽を既に見せながらも、「ディオニュソス的なもの」の象徴となることを、その最も本来的な任とする。換言すれば、「音楽」という言語を、世界の最も直接的な表象とした仕方、事実上階層序列化されてしまうのである。ここでニーチェが「音楽」という言語の特権性を遵守する理由として、コインの如く表裏の関係である一つの根本問題がニーチェの念頭にあったのは間違いない。即ち、「裏面(根本動機)」には「シレノスの知恵」(KSA 1, S.35)に代表される「生存の意味」を巡る問題意識である。このディオニュソス的な知恵は、同時に『誕生』における世界規定にもなっており、この領分において、ディオニュソス的なものは、『誕生』において絶対的な優位性を有する。というのもこの根本問題、即ち「暗い世界の真相」なくして、『誕生』において「美」は成り立ちえない構造になっているからだ。そして他方、「表面」にあったものが、ワーグナー芸術に託した全幅の信頼であった。言うまでもなく、この現実的な「支援」は、一古典文献学教授であったニーチェをして、ここまでのセンセーショナルな著作を執筆させる動機づけを強めた要因であった。

しかし『誕生』後に執筆された未公開論文「道徳外の意味における真理と虚偽について」(1873)のメタファー論において、「仮象」は「根源的一者」からの離脱を初めて示す。ここでの「仮象」の「脱・芸術家形而上学」化は、KGW 第2巻「バーゼル大学講義録」で展開されたレトリック論と密接な関係にあり、かつこのレトリックの普遍化において不可避の役割を果たしているのが、「第一のメタファー(神経刺激から形象への転移)」における「感覚器官の生理学」である。これまでのニーチェ研究の定説においては、『人間的、あまりに人間的』(1878)から突如として「科学」との接点を確認されると考えられてきたが、既に「前期」ニーチェが同時代の科学的知見を受容していたということも、これらの未公開テキストから窺い知ることが出来る。以下、これら未公開テキスト

において展開されたニーチェの思索の痕跡を追ってみたい。

## 第一節 メタファー

「道徳外」論文において最も有名なフレーズであるが、ニーチェは以下の様に述べる。

一つの神経刺激が、まず一つの形象の中へと転移される！これが第一の隠喩。その形象が再び音において模写されるのだ！これが第二の隠喩。そのたび毎に、全く別様の新しい領域の真っ只中に向かって、領域の完全なる跳び越し(vollständiges Überspringen der Sphäre)が行われているのだ(KSA 1, S.879)。

しかしそもそも「隠喩(Metapher)」とは何か。代表的な定義は、アリストテレスによる「比喩(転用語)とは、(あることを言い表すさい)本来別のことをあらゆる語を転用すること(Übertragung)をいう」というものだ<sup>1</sup>。ニーチェ自身、「レトリック講義」で、アリストテレスのこの隠喩定義を引用しているが(KGW 2/4, S.444)、辞書的な意味においてもたしかに「隠喩」とは、「狭義には、普通の用語法によっては名付けられないような対象や事態を、その特徴においてよく似た別のものの名辞によって名付ける修辭的技法をいう」が、「広義における隠喩は、転義的比喩の一切を無差別に指す」とある<sup>2</sup>。例えば「アキレウスは獅子である」という一文は、無論アキレウスが実際にライオンであると言いたい訳ではなく、アキレウスが勇者であることを表現する上で、ここでの「獅子」は「通常」の意味ではなく、「勇敢な戦士」の意味に転義されて用いられているのである。

しかし「通常」、我々が上のように「隠喩」について言及したり、あるいは「隠喩」を用いたりする場合、それはあくまで「隠喩」が「通常」の言語使用とは異なる特殊な修辭的技法であることを了解した上でのことである。即ち、我々は「隠喩」ならざる「正当なる」言語を念頭に置き、確保した上で、「隠喩」について言及するに過ぎない。この意味において、普通「隠喩」はいわゆる「レ

トリック論」の範疇において語られるに過ぎない。だがニーチェは、「隠喩」の中心概念である「転移・転用(Übertragung)」の含意を拡張使用することで、言語における「正当／異端」の境界を取っ払い、「一切の言語は隠喩である」という驚くべき「言語論」を展開する。

話し言葉(会話、演説)という芸術手段を意識的に使用することが認められるとき、我々はある著者、ある著作、ある文体を、いつも或る種の厳かな非難とともに、「レトリック的」とであると形容する。我々は「レトリック的」とであるということが、自然的でなく、故意の印象を作るものだ、と誤って信じてしまう(KGW 2/4, S.425)。

だが、「人がそれに訴えることができるような、言語の非レトリック的な『自然性』などというものは、全く存在しない」(ebd.)とニーチェは主張する。

言語そのものが、まさにレトリック的な芸術の成果なのだ。アリストテレスがレトリックと呼んだ、活動し印象を成すところのものを事物について見つけ、そして妥当させる能力は、同時に、言語の本質である(ebd.)。

「道徳外」論文においても、「言葉を作る人は、ただ事物の人間に対する関係だけを表示するのであって、その関係を表現する補助として、極めて大胆な隠喩を用いるのである」(KSA 1, S.879)とニーチェは語る<sup>3</sup>。だがそもそも何故、ニーチェは「一切の言語が隠喩である」と語れるのか。現に我々読者に対して、紛れも無く「哲学的な言述」で、理解の妥当性を要求しているにもかかわらず、である。ニーチェの「隠喩」を単なる「言語論」の範疇において理解するならば、ニーチェの言述は単なる自己矛盾でしかなかるう。しかし「隠喩」についてニーチェが語る際、「第二のメタファー」はそれ自らが、既に「第一のメタファー」によって濾過され、加工されることを余儀なくされているのだ、という論拠が姿を現す。ここで「第一のメタファー」は、単に「無意識」という言葉では片付けられない重みを持つ。

要するに、ニーチェは「メタファー」の中心概念である「転用」を、たしか

に「言語論」としても特異な仕方では拡張させているのだが、狭義の「言語論」を超える射程を備えるものとしても利用している。それこそが、一生物としての我々人間が、世界を「人間化」する過程で避け切れぬ境位として常に既に行っている「転移」であるのだ。これが、人間の「生理的次元」における「第一のメタファー」である。この時「転移」は驚くべきことに、俄かに生理学用語としてのニュアンスを我々に示す。

## 第二節 「第一のメタファー」

ニーチェ思想の中心概念が「生」であることは周知の事柄である。しかしニーチェが「生」概念を形成する過程において、19世紀に飛躍的な進歩を遂げた「生理学(Physiology)」が大きく寄与しているということは、今日の我が国のニーチェ研究において決して自明な事柄ではない。

「一切の論理とその運動の見かけの自主独立性の背後にも、諸々の価値評価が、もっとはっきりと言え、或る種の生の保持のための生理的欲求が隠れている」(KSA 5, S.17)といった言葉に見られる、「生理学」に対する晩年まで続くニーチェの関心は、「理性的動物としての人間」というシェーマを延長させた、近代的主観主義を後ろ盾とした一切の思考形態に対する反旗であり、それは19世紀に台頭してきたパラダイムでもある。近代以後、自らが「理性的動物」であることを徐々に自覚し始めた人間は、自らを世界の中心に据えられたものと信じ、先人による(前近代的な)かつての「神話的世界観」を嘲ったかもしれない、それはもはや「寓話」に過ぎぬと。あるいは、現在の我々にとって乗り越えられるべく準備された、「理性」の揺籃期に過ぎなかったのだと。しかしニーチェが生きた19世紀は、進化論を始め、従来の間人中心主義的な驕りの方こそ、一つの「神話」に帰してしまいかねない、「人間」についての諸々の挑戦的なパラダイムが形成された時代であった。ニーチェはその卓越した嗅覚で、「科学の時代」とも形容される同時代の空気を紛れもなく吸収しているのである。

我々にとって意識的になされる訳でもない言語が、既にレトリックと形容されて然るべき産物であることを示すために、ニーチェは生理的次元で常に既に成されている「転移」のプロセスを語ろうとする。そこでニーチェは「神経刺

激」に代表される、生理学用語を援用する。

言語を形成する人間は、事物や出来事を受け取るのではなく、刺激(Reize)を受け取るのである。彼は感覚(Empfindungen)を再現するのではなく、そうではなく単に感覚の模像(Abbildungen von Empfindungen)を再現するのである。神経刺激(Nervenreiz)によって引き起こされる感覚は事物をそれ自身としては受け取らない。この感覚は一つの像(Bild)を通じて、外に向けて表されるのだ(KGW 2/4, S.426)。

前節で「レトリックは言語の本質である」と述べられたがこの箇所に、何故に言語がそもそもレトリックであるのかに関するニーチェなりの答え、認識論的なバックグラウンドがある。言語が表わさんとするもの、そのものが既にして、「神経刺激」により生み出された「感覚についての模像」であることを余儀なくされているのだ。

次のことは第一観点である。それは、言語はレトリックである、ということ。というのも、言語はドクサのみを伝え、何らエピステーメーを伝えようとはしないからである(KGW 2/4, S.426)。

如何に「事物の真の姿」(エピステーメー)を言表せんとしても、言語そのものが生理的次元における「転移」を経ることを余儀なくされている以上、言語は、ドクサ(憶見)であるという性格を如何とも免れ得ないのである。言語の恣意性は、それが言語そのものにとって除去されるべきものかどうかという議論を待たず、言語そのものにとっての本質的な要素を成す。

以上「レトリック講義」から、次の論点が確認される。一点目は、「言語はレトリックである」ということ。そして二点目は、神経刺激から感覚への、人間の「生理的次元」での「転移」が、一点目の論拠となっている、ということである<sup>4</sup>。

### 第三節 「概念」批判 - 「忘却・隠蔽」の暴露

これまで述べたことを一言に纏めると、「言語」とは一切が「隠喩」に過ぎず、その理由は「言語」が模写する「形象・感覚」そのものが既にして、神経刺激からの「転移」を余儀なくされているからだ、ということになる。「道徳外」論文に話を戻すと、故にその言語によって構築された「概念」も同じく「虚偽」の域を超えるものではない、とニーチェは言いたい訳だ。しかし言語が単に「恣意的」な産物に過ぎぬならば、何故に「概念」という「建築物」が建立可能であるのか。

真理(Wahrheit)とは、隠喩、換喩、擬人観などの動的な一群、つまりは人間的諸関係の総和であり、それが詩的、修辭的(poetisch und rhetorisch)に高められ、転用され、修飾され、そして長い使用の後に、一民族にとって確固たるもの、規準的なもの、拘束力のあるものと思われるようになったものである(KSA 1, S.880)。

ニーチェは無論ここで強烈な「真理」批判、「概念」批判を展開しているのであるが、注意すべきは、「真理」と呼ばれるところのもの、「概念」と呼ばれるところのものが、この「人間社会」において現に成立しているということ、その「現事実」までをも否定しようとは決してしていないのだ、ということである。だからこそ「真理」なり「概念」なりを、「長い使用の後に、一民族にとって確固たるもの、規準的なもの、拘束力のあるものと思われるようになったもの」と語っているのだ。この点をもう一步踏み込んで考察する上で、「コイン(貨幣)」のメタファーが一つの示唆的なヒントを与えてくれる。

真理とは、錯覚なのであって、たびたび人がその錯覚であることを忘れてしまったような錯覚なのである。それは、使い古されて感覚的に力がなくなってしまうような隠喩なのである、それは、肖像が消えてしまってもはや貨幣としてではなく今や金属として見なされるようになってしまったところの貨幣なのである(KSA 1, S.881)。

普段の我々の日常生活において、「貨幣」は「貨幣」として、社会的に「通用・妥当」している。このことに我々は無論何ら疑念を抱かない。しかし「最初に」（この「最初に」こそが問題となるのだが）、「貨幣」が「貨幣」として、「貨幣」ならざるその他の金属とは異なる自らの「身分」、いわばその特権的身分を（「通用・妥当」させる為に）明かし立てるものとして、「肖像(Bild)」が刻印されていたはずである。この限りで、元来「肖像」は「貨幣」にとって決して別つことの出来ないものであったはずである。しかしそれが「永い使用の間に」、使い古され、摩滅されることで、「肖像」は「貨幣」から、その姿を消してしまう。にもかかわらず、「貨幣」は「貨幣」として、我々の人間社会において、その身分を相も変わらず存続しているのである。

「にもかかわらず」と述べたが、ニーチェは「肖像」が（永い使用の果てに）「貨幣」からその姿を消すプロセスを、「貨幣」が「貨幣」として我々の人間社会において「通用・妥当」するプロセスと、何ら齟齬をきたす過程としてではなく、むしろ等価の過程と考えていると、捉えるべきだろう。即ち、「忘却」の過程こそが、「通用・妥当」の過程であると。この限りでは、ここでの「忘却」(Vergessenheit)は、むしろ「隠蔽」(Verborgenheit)に近い意味合いを帯びているとも言える。

「第二のメタファー」、即ち「形象→音」の「転移」により、「語」が形成される。しかしこの時点では、「語」は我々の「言語」の中に、何ら「語」としての身分を未だ得ていない。「語」が「語」としての「身分」を我々人間社会において獲得するプロセスを描くものとして、上で述べた「貨幣」が「貨幣」として通用・妥当するプロセスは解釈できる。即ち、ある「語」の特権性を保証していたところの「(当初の)形象」は、逆説的にも、それが摩滅されることによってこそ、「語」として妥当していくのだと。これは裏を返せば、我々は「語」が発生する端緒を明瞭に把握することが出来ない、ということでもある。(語を)「使用しているのに」ではなく、「使用しているからこそ」である。



#### 第四節 「生」について「語る」ということ

「真理」「概念」が形成されるプロセスにおいて、「忘却」が必須の契機として機能しているということをニーチェの考察は示している。「概念」が成立する過程で働く「忘却」は、無論「第二のメタファー」(言語)の成立を前提とした上で働く動因であるとニーチェは述べている。しかし「第一のメタファー」についても、同じく「忘却」概念の重要性が取り出せる。即ち「第二のメタファー」「第一のメタファー」双方から、「忘却」をキータームとして、言わばパラレルな構造が取り出せるのである。

「コイン」が「コイン」として「通用・妥当」するプロセスを明瞭に把握することが出来ぬと同様、「語」が「語」として形成されるプロセスを、我々は明瞭に把握することが出来ない。かの「コイン」のメタファーは、「語」が「語」として成立するプロセス、「真理」を庇護する「概念」が「概念」として成立するプロセスを示すものに尽きず、「神経刺激」から転移された「形象(感覚)」が「形象(感覚)」として成立するプロセスとしても、解釈することが出来る。つまり「神経刺激→形象(感覚)」のプロセスにおいても、「貨幣」のメタファーは拡大解釈可能である。「通用・妥当」のプロセスは、ここにおいてもまさに、「忘却・隠蔽」のプロセスでもある。

このプロセスについての「学的」考究は、「(感覚器官の)生理学」あるいは「生物学」という部門において今日益々然るべき位置が与えられているのかもしれない。例えば、たしかに今日の生理学・解剖学は「人体の驚異」を我々に教えてくれる。しかし、より一層驚愕すべきことは、その「驚異」のプロセスが、我々にとって、「かくも見事に隠されている」、という現事態でもある。実証主義的・自然科学的な方法・説明により抜け落ちる「忘却・隠蔽」の驚異を我々に曝すという一事においては、ニーチェの言述はそれらの手法よりも「雄弁」なアプローチを採用しているとも言える。

一体、人間は、自己自身のことについて何を知っているのであろうか！ 実際、人間は、明るく照らされたガラス箱の中にでも寝かされているように、完全に自分自身のことを知覚するなどということが一度でもできたことが

あったであろうか？ 自然は彼に、最もありふれたことさえも、自分の身体についてさえも、沈黙して語らないではないか、そしてその結果、内臓のうねりや血行の急速な流れや錯綜した筋の震えをよそにして、彼を傲慢な詐欺的な意識の中に封じ込め、閉じ込めようとするのである！ 自然は鍵を投げ棄ててしまったのである(KSA 1, S.877)。

「道徳外」論文において、あるいは同時期の遺稿において、何故にニーチェは「昆虫・植物」といった、「人間ならざる種」について、あるいはより正確に述べれば、「人間ならざる種の生物の世界化」について語っているのか。これは「人間という種の世界化」を確保する為の裏返しであると解釈することが出来る。即ち、ニーチェはここで「人間という種」の普遍性は確保しようとしているのである。というのも、もし「人間という種における世界化」に対してさえも、その「普遍性」、あるいは「妥当性」に関して疑問を呈するならば、ニーチェが「道徳外」論文において狙っている「概念批判」の射程さえも失われることになるであろうから、である。

我々は「第一のメタファー」について、如何にして語れようか。「神経刺激 → 形象(感覚)」への「転移」を、我々は明瞭に把握しえようか、あるいは如何にして語れようか。「第一のメタファー → 第二のメタファー」を「正当な仕方」で、継続・延長させるものとして「芸術としての哲学」をニーチェは称揚しているのだと、ひとまずは解釈することが出来る。しかし裏を返せば、ニーチェは「第一のメタファー(生)」に「適切な仕方」で接近する為にも、「メタファー(言語)」を問題にしている、とも解釈出来るのである。

## 結

かつて現象の彼岸に措定された「生」は、「道徳外」論文においては我々の日常的な「生」それ自体が既にして、隠されてあることに眼を向ける射程を得ている。その洞察を可能にしているのは、言語における「転移」と「生」とのアナロジーである。

しかし「道徳外」論文にて積み残された課題は、言わば「原メタファー」で

ある「神経刺激 → 形象」への「転移」において、批判に晒されることなく未だ「彼岸」に確保されることとなる「物自体」、あるいは「事物」の存在である。ニーチェ公刊著作の中で、この課題解決の試みを最初に展開した箇所が、『人間的』第一節「最初の事物と最後の事物について」である。だが、既にこの時期にしてニーチェが科学に全面的に信を置いている訳ではないことを示すことが出来れば、いわゆる「前期」と『人間的』とを、「仮象」概念の成熟のプロセスとして、連続的に捉える視座を確保する可能性が見えてくるのである。

### 註

ニーチェのテキストは以下のものを使用した。レトリック講義テキストは、*Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, Zweite Abteilung, Bd. 4*, hrsg. von Fritz Bommann, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1995 (KGW 2/4 [巻数/号数] と略記)。それ以外のテキストは、*Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe*, hrsg. von G. Colli und M. Montinari, München: dtv und Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1999 (KSA と略記)。遺稿についてはノート番号・断片番号を示す。日本語訳は各種の版を参照させて頂き、必要に応じて若干の変更をして用いた。なお原文の強調は省略し、引用文中の強調は全て引用者によるものである。

- <sup>1</sup> アリストテレス『詩学』79頁(1997年、岩波文庫)。
- <sup>2</sup> 『レトリック事典』211頁(2006年、大修館書店)。また(「隠喩」という言葉が意味の広がりを持つのは)、「アリストテレスにおける『メタボラ』が、『転用語』の意味であり、語源的にもそれが『語/意味の移替え』を意味していることから、自然な使い方と言うことができる」とある(同頁)。
- <sup>3</sup> その具体例は「道徳外」論文において様々なバリエーションで語られるが、その一つが「一枚の木の葉」である。「一枚の木の葉が他の一枚に全く等しいということが決してないのが確実であるように、木の葉という概念が、木の葉の個性的な差異性を任意に脱落させ、種々の相違点を忘却することによって形成されたものであることは確実なのであって、このようにして今やその概念は、現実の様々な木の葉のほかに自然のうちには『木の葉』そのものでも言い得るような何かが存在するかのような観念を呼び起こすのである」(KSA 1, S.880)。
- <sup>4</sup> ニーチェは「レトリック講義」において「隠喩(Metapher)」「提喩(Synekdoché)」「換喩(Metonymie)」の「三種の比喩(Tropen)」を解説しているのだが、特に注目したいのが「換喩」である。「換喩」についての辞書的定義は「一部の言葉を省略し言葉そのものを短縮しようとして出来た転義的比喩」とある(同じく『レトリック事典』244頁)が、ニーチェは「レトリック講義」で「換喩」の一例として「我々は『飲み水が苦い』と言う、『飲み水が我々の中にそのような感覚を呼び覚ました』と言う代わりに」(KGW 2/4, S.427)と語る。この箇所からも、ニーチェが意図する「レトリック」の射程が、それが単なる「レトリック論」の解説に尽きるものではなく、人間の「生理的次元」をも視野に入れたものとして解釈可能であることが理解される。また「道徳外」論文の準備

草稿においても「換喩」についての同種の言及が散見される(KSA 7, 19[204], [215], [242])。

(いまさき たかひで／法政大学)